

# 2015 年 救急センター活動報告／北海道 DMAT 実動訓練報告

麻酔科  
下 館 勇 樹

## はじめに

西胆振の救急医療は軽症から重症に至るまで、当院を含む 2 次救急病院がそれぞれ補完的な役割を果たしながら辛うじて維持している。理屈の上ではこの地域に 3 次救急病院（救命救急センター）は存在しない。必要に応じて上位圏域である札幌圏へ患者を搬送して対応することになっているが、そのような長距離搬送に耐え得る重症患者は限られており、実際には地域内で診療を完結していることが多い。すなわち、西胆振の救急病院は連携を密にすることにより、2 次ではなく 3 次救急までカバーしていると言っても過言ではない。

## 1. 救急車の搬入状況

西胆振における各 2 次病院の救急車受け入れ状況を図に示した。

昨年の傾向と同様、西胆振地域では製鉄記念病院への搬入数が増加している。脳疾患・高エネルギー外傷の受け入れ先として当院の果たす役割は、依然として大きい。

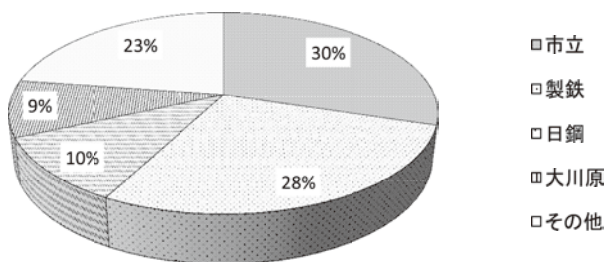


図 1 2015 年の病院別救急車搬入数

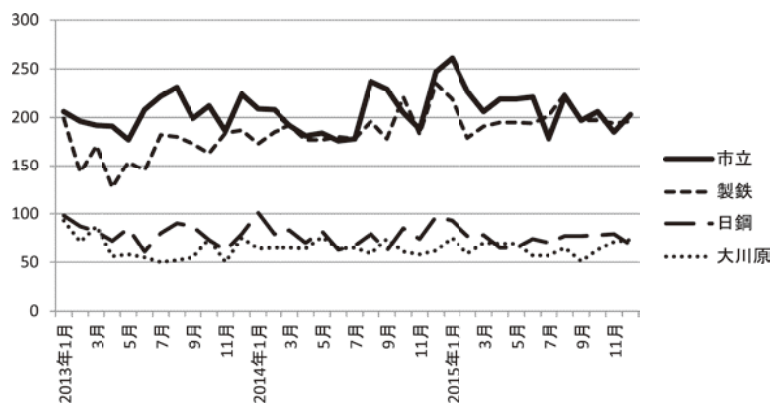


図 2 過去 3 年間の病院別救急搬入数

しかし、循環器内科の医師減少に伴い、胸苦・胸痛を主訴とする患者は受け入れることができなくなった。緊急心カテーテル検査も困難になったということは、たとえ当院かかりつけの患者であっても、ACS が疑われる場合は製鉄記念病院へ直行したほうが、予後の面から望ましいであろう。2016 年度はこのような状況に加え、心臓血管外科・耳鼻科・形成外科の常勤医が不在となる。救急隊からの搬入要請に応えることができない事案も増え、救急搬入数の減少が危惧される場所である。

## 2. 北海道 DMAT 実動訓練

2015 年 7 月 11 日(土)・12 日(日)の 2 日間、室蘭市と伊達市を会場にして、北海道 DMAT 実動訓練が開催された。日常業務の中で意識されることは少ないが、災害時には ER・HCU・ICU が重症患者の診療拠点となる。そこで本稿でも訓練について触れておきたい。

西胆振は北海道有数の活火山である有珠山を擁しており、およそ 20 年から 30 年と言われる噴火周期から考えると、既に次の噴火に対する準備に着手すべき時期に来ている。前回 2000 年 3 月の噴火では一人の災害死も出さず、関係機関の連携やハザードマップの事前作成などが奏功した好例と評価されたが、次の噴火においても災害死ゼロが達成できるとは限らない。イザという時には行政に加え、消防・警察・医療機関などが緊密に情報を共有し、迅速な活動を取ることが重要である。もちろん医療は胆振地域のみで完結できない可能性もあり、全道からの応援を受ける準備も必要となろう。このような観点から 2015 年度の北海道 DMAT 実動訓練は、当院が有珠

山噴火時の活動拠点本部に指定されたという想定で、7つのパートから構成・企画した。

## 【7月11日】

### 1) 市立室蘭総合病院への参集訓練

北海道は東西に約500km、南北に約400kmの広大な地域である。道内でDMAT出動要請があった場合、多くのチームは陸路で災害現場に参集しなければならないが、実際にどれだけの時間がかかるのであろうか。訓練1では各地から総勢25チームのDMATが当院を目指して参集し、最も遠方である根室・稚内のDMATは到着までに7時間以上を要した。

また、各地から参集したDMATを迎える当院では、DMATが円滑に活動できる環境を整備することが求められる。2014年度災害訓練の反省を踏まえ、今回は南棟3階リハビリテーションセンターをDMAT本部、また体育館をDMAT待機場所として試用した。

### 2) 伊達市内で現場救護所訓練

「噴火により、火口付近の市街地で多数の傷病者が発生した」との想定で、参集したDMATから6チームを伊達市内に派遣。各チームは実際に伊達市内に準備された訓練会場へ移動し、多数傷病者のトリアージから搬送までを行った。

### 3) 室蘭市内で多数傷病者の受け入れ訓練

上記の訓練2から引き続く流れとして、伊達市内から搬送された傷病者を当院と日鋼記念病院で同時に受け入れる訓練を実施した。当院では2014年度災害訓練と同様に、院内スタッフと外部から支援に入ったDMATがうまく連携できるかを問う内容である。さらに、当院と日鋼記念病院の間で、傷病者の転院搬送が相互に行われた。

## 【7月12日】

### 4) 伊達赤十字病院からの病院避難

ハザードマップによれば有珠山で大規模な噴火が発生した場合、伊達赤十字病院も降灰の被害を受けるため、入院患者全員を安全な地域まで避難させる必要がある。そのような状況に対応すべく、DMATと自衛隊のコラ

ボレーションで病院避難訓練を実施した。軽症者はバスなどの交通手段を用いるが、中等症および重症の患者は救急車を確保しなければならない。今回の訓練ではDMATの保有する車両と自衛隊の救急車を用いて、実際に室蘭市フェリーターミナルまで患者を搬送した。

### 5) フェリーターミナルビルでのSCU訓練

前日に当院と日鋼記念病院に収容した重症者、および伊達赤十字病院からの避難者の中に、広域医療搬送を必要とする患者がいるとの想定で、室蘭市フェリーターミナルにSCUの設置と運営訓練を行った。自衛隊UH-1ヘリコプターがフェリーターミナルから幌別駐屯地（仮想千歳基地）へ2往復のフライトで、重症患者2名を空路搬送した。

### 6) 自衛隊ヘリで機内活動訓練

上記訓練5.で各フライトにDMAT1チームが同乗し、担架の搭載や飛行中の患者管理訓練を行った。

### 7) 胆振総合振興局内で行政との連携訓練

災害時に地域の医療情報を収集してそのニーズをまとめるのは保健所の役割である。DMATは超急性期の災害医療を担当するが、亜急性期以降まで円滑に地域医療を引き継いでいく上で、DMATと保健所との連携は欠かすことができない。今回はDMAT実動訓練初の試みとして、胆振総合振興局内に立ち上げられた北海道災害対策地方本部（仮想）に保健所・室蘭市医師会・地域災害医療コーディネーター・DMATが参集して、情報共有を行うシミュレーションを実施した。

以上、平成27年度北海道DMAT実動訓練の概要を紹介した。災害医療は救急医療と決して異なるものではない。消防や自衛隊など他職種との調整は災害時に特有ではあるが、傷病者に対して行われる緊急処置やトリアージの考え方は、あくまでも平時の救急医療の延長線上にある。救急センターで日頃から培われたスキルと知識は、これからも当院の災害医療体制の重要な部分を形作ることになるだろう。